

【ねがいましては】

平成15年11月27日

第160号

KYOWA SCHOOL

「転ぶこと」

もうかなり以前のことなのですが、あるテレビ番組で、アメリカでの子育てと日本での子育てについてジャーナリスト達が話していました。

その中でも特におもしろいなと感じたのは、ある方が船旅の最中に、ちょうど同じ1~2才くらいの子供を連れた日米数組の親子連れの行動に強い印象を受けたそうです。

日本人の親たちは共にデッキに出て楽しそうに会話を楽しみ、海風にあたっています。もちろん子供が海にでも転落しては大変です。しっかりと手をつなぎ、自分達は楽しそうに会話を花が咲いています。世間話に花が咲く傍ら、子供達は手をつながっていますので、転びもしないし転落もしません。・・・一方、アメリカのお母さん達は、お子さんに紐をつないで自由に遊ばせています。一つ間違えれば海へ転落です。最低限の命綱を用意しています。そしてお母さんの目は、しっかりとお子さんに注がれています。

そしてジャーナリストはさらに・・・。

「日本のお母さん達は、転ばないようにしっかりと手をつなぎ、子供が転びそうになると、その手で瞬間に立ち直らせてしまう。が、アメリカのお母さん達は、転んでも黙って立ち上がるのを見守っている。そこに日本とアメリカの大きな子育ての違いがあるようだ。日本ではなるべく転ばないようにする。アメリカでは、転んでもひとりで立ち上がるのを見守る。・・・・」

そのあとも延々論じていたのでしょうか、残念ながら記憶に残っていません。が、私の脳裏に今でも残っているその話は、今の日本にしっかりと根付いてしまっているようになります。

『転ばないようにしっかりと手をつなぐ』・・・一見とても強いやさしさのように受け取られがちな中に、実は結構つないでいる側の身勝手な気持が宿っていたことに、きっと私は心を『はつ』とさせたのだと思います。

転んでもじっと見守る。心の中では「がんばって」と、エールを送りながらも、じっと見守る。そして転ぶことを繰り返すうち、やがて転ばなくなる。

この両者の違いは、今の日本の教育のあり方にもしっかりと現れています。

高校受験に失敗したら、人生落ちこぼれ組決定。合格すれば成功者。このような考えに、日夜心を窮屈にしながら勉強している中学生は多いのではないかと思います。特に転ぶことに慣れていない人は・・・。

そもそも恐ろしいことは、そのお子さんの失敗に、お母さんご自身も幼少から手をつながれて、失敗知らずでいられたとしたら、真っ先にお子さんの失敗が「人生敗北」へのろしへとながってしまうことです。

ここでの「母」の対応が大切なのです。「ま、いつか。ドンマイ、ドンマイ。精一杯やったんでしょ！」

中学校での三者面談では、担任の先生は間違いなく目標校のレベルを下げて薦めてくるのだそうです。

私はこの点にも少なからずとも『とまどい』を感じます。

『青春』という言葉から連想されること、『消極的』『積極的』どちらが相応しいでしょうか。

私が思うには、もっともっと前を向いて歩こう。失敗大歓迎！子供のうちだから前向きな失敗も大きな怪我につながらなくて済むはずです。なぜなら『家庭』という大きくて温かいものに包まれているからです。

家庭は、転んだ子供達の心身ともに『癒し』の場であるからです。

転んでも転んでも、立ち上がる方法を身に付けてきた諸君。きっと『入試』と聞いても「よっしゃ！」と声出して歩けますよね。

この教室には、転ぶことがとても怖くて怖くて仕方がないという、勉強恐怖症にかかった子が結構入ってきます。私は常に同じことを言い続けます。「結果ばかり気にしないでね。今、たった今、精一杯向かっているのであれば、100点だよ。家でも学校でもそのことを評価してくれないよね。でもここはするよ。結果が気になるってことは、きっとお家の人の顔が気になるってこと。それでは集中などできないよ。机に向かっていても、ちらちらとお母さんの顔じゃーね・・・。気にならない気持ち、早く手に入れようよ。」

結果にうるさいお母さん。お子さんは真剣に歩いています。真剣に歩こうと努力しています。でも、成績のこと、いつもつい一言、「かつ」と言ってしまうお母さん。お子さんが真剣に歩こうとしているその心の中に、出てこないでください。一番お子さんの勉強の『邪魔』をしているのは、お母さんかもしれません。

さて、やっと期末テストも終わりました。また、自分の思い思いの勉強に取り組めます。そんな日が来たことを目を輝かせながら、楽しみにしている中学生がいます。よかったです！

12月の予定 8日（月）珠算・暗算検定試験合格発表

冬休みの予定、冬の講習の予定は、別のお手紙でお知らせします。